

令和元年6月24日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13291

研究課題名(和文)作家論による神獸鏡の編年

研究課題名(英文)Chronological Study of the Shenshou Mirrors from the Viewpoint of the Craftsmen

研究代表者

岡村 秀典 (OKAMURA, HIDENORI)

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：20183246

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：銘文をもとに、神獸鏡の作者の流派を大きく4期に区分した。第1期は、2世紀に四川にて広漢派が成立し、環状乳神獸鏡を創作した段階である。第2期は、180年代に呉郡の「張氏元公」や「蓋方」らが広漢派の環状乳神獸鏡を模倣し、190年代にそこから同向式、対置式、重列式という3種類の神獸鏡が生みだされた。第3期には215年ごろ浙江に会稽派が出現し、第2期におこなわれた3種類の神獸鏡を模倣し、干支を用いて鏡の鑄造年月日を表示することに異常な能力を発揮した。第4期は呉派と会稽派が主に対置式神獸鏡を制作した。252年に孫権が崩じると、後継の皇帝たちは「黄武」や「黄龍」など呉建国時の年号を追頌した鏡を制作した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国魏の皇帝が邪馬台国の卑弥呼に贈った「銅鏡百枚」は三角縁神獸鏡か否か。日用の化粧具のほか、結婚のしるし、護符、政権のプロパガンダなど、さまざまに用いられた古代の鏡は、どのようにつくられ使われてきたか。これらの疑問に答えるため、神獸鏡づくりに情熱を注いだ工匠たちの営みに注目し、従来のように図像文様を分類するだけでなく、銘文を読み解くことにより、鮮やかに古代びとの姿をよみがえらせた。

研究成果の概要(英文)：Based on the analysis of the inscriptions, I divide lines of the craftsmen school of the mirrors with the image of divinities and animals (or Shen-shou mirrors) roughly into four periods. In the first period, Guan-han school founded in Sichuan, created Shen-shou mirrors with ring-like nipples in the second century. In the second period, Zhang-shi Yuangong working at Wu-jun and Xiang-fang began to imitate the Shen-shou mirror of Guan-han school in 180s, and broke up into three types of Shen-shou mirror with the unidirectional, the contrapositional and the stratified arrangements in 190s. In the third period, Kuai-ji school founded about 215 A.D., imitated the three types of Shen-shou mirrors in the second period, but there are plenty of noteworthy aspects to the inscriptions mentioned with a date of casting and its sign of the Chinese sexagenary cycle. In the fourth period, Wu and Kuai-ji school mainly produced Shen-shou mirrors with the contrapositional arrangement.

研究分野：考古学

キーワード：考古学 美術史 中国史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

考古学の型式学は、資料の形や文様をもとに型式分類し、時空間におけるその位相を議論する。しかし、資料数が多いと数量的・機械的に類型化してしまい、各資料のもつ個性は見落とされがちである。これにたいして美術史や文学の作家論は、個々の作品を鑑賞することから出発し、作家の芸術性や時代様式に議論を展開させてゆくのがふつうである。

後漢鏡に個人の作鏡者名が記されていることは知られていたが、従来の考古学では文様の型式学的分析がおこなわれるだけで、作鏡者を手がかりに作鏡動向が論じられることはなかった。

2. 研究の目的

本研究は、2～3世紀の中国における神獸鏡の作者それぞれに焦点を当て、かれらの作鏡動向をもとに神獸鏡全体の新しい編年を組み立てるとともに、日本の前期古墳から出土する三角縁神獸鏡の「陳氏」や「張氏」らの作鏡動向と対比しようとするものである。

3. 研究の方法

2～3世紀の神獸鏡を主な対象に、研究期間を3年間とする。作鏡者名の記された神獸鏡を網羅してその制作動向をまず分析し、次いで個性的な図像文様の表現に着目して作鏡者名のわからない神獸鏡の関連づけをおこない、神獸鏡全体の編年を再構築する。

4. 研究成果

時期区分に關して、徐苹芳は漢鏡と三國鏡との境界を建安元年(196)とするが、ここでは漢獻帝が魏文帝に天子の位を禪讓した公元220年を漢鏡7期の下限とする。本期における鏡の制作地として、大きく徐州系、江南系、華西系の3區系が識別できる。漢鏡6期の淮派は徐州系の、吳派は江南系の一派として、それぞれ本期にも繼承される一方、この時期に飛躍的な發展を遂げたのが華西系である。“廣漢西蜀”で制作された元興元年(105)の環狀乳神獸鏡、獸首鏡、八鳳鏡が知られているが、紀年鏡はその後しばらく消失し、150年代になってから、その廣漢派が制作した環狀乳神獸鏡と獸首鏡の紀年鏡が再び現われ、本期の代表的な鏡種として流行する。華西系では、この他に、後れて方銘獸紋鏡、三段式神仙鏡、對置式神獸鏡等が創出される。3世紀以後の華西系は不明だが、およそ180年代から廣漢派の環狀乳神獸鏡や八鳳鏡、及び“九子”、“三王”の對置式神獸鏡が江南系に受容される。廣漢派の環狀乳神獸鏡は同時に徐州系にも影響を及ぼしている。その徐州系では、漢鏡6期末に“袁氏”が登場して獨特の畫像鏡や浮彫式獸帶鏡を創作し、淮派の“龍氏”や“蔡氏”等の畫像鏡、“上方”浮彫式獸帶鏡、飛禽紋鏡等、それぞれに特色のある鏡種が生みだされている。そして、本期後半に華西系から神獸鏡の情報が傳わると、それに倣った環狀乳神獸鏡、同向式神獸鏡、畫紋帶四獸鏡等が制作されたほか、畫像鏡と折衷した斜縁神獸鏡が創作された。江南系でも、180年代に神獸鏡の情報が傳わると、“蓋(方)”や“吳郡張元公”等が環狀乳神獸鏡を手始めに、そこから同向式神獸鏡、對置式神獸鏡、重列式神獸鏡を制作していった。以上のように、徐州系と江南系では漢鏡6期から繼續して鏡が制作されていたほか、本期前半に華西系で展開した神獸鏡が、本期後半に徐州系と江南系に強い影響を及ぼし、それぞれに多様な鏡種が生みだされた。地域ごとの特色が現れると同時に、地域を越えた鏡の流通や鏡匠の移動も活発であった。特に日本へは樂浪郡を通じて徐州系の鏡が大量に流入したことに加えて、徐州系は日本出土の三角縁神獸鏡の母胎となったことから、本期の鏡は日本考古學においても注目を集めている。したがって、紙幅の関係から、ここでは華西系と徐州系についてのみ取り上げ、江南系については割愛する。

華西系 浮彫表現の神仙と靈獸を主紋とする神獸鏡については、樋口隆康の類型と名稱が適用しており、本文でもそれに従う。神獸鏡の中で最初に出現したのは環狀乳神獸鏡である。靈獸の肩と腰が環狀乳を呈し、その背中に神仙が乗った主紋をもち、内區外周に半圓と銘文を入れた方格とを繞らせ、外區は銘帯ないしは畫紋帯となる。紀年鏡をみると、元興元年(105)銘の三神三獸鏡を嚆矢とし、永康元年(167)～熹平七年(178)の間に四神四獸鏡へと變化した。四神四獸鏡の神仙は、西王母、東王公と黃帝、伯牙の組合せである。京都の泉屋博古館に所藏する延熹二年(159)環狀乳三神三獸鏡の外區銘は、四言句を主とし、

延熹二年五月丙午日、天大迹、廣漢西蜀、造作明竟、幽凍三商。天王日月、位至三公兮。
長樂未英。吉且羊。

とある。“五月丙午日、天大迹”とは火氣の最も盛んな鑄造の吉日吉時を指し、“廣漢西蜀”は四川の廣漢郡に所在した制作工房の名である。王綱懷氏藏の延熹三年(160)獸首鏡は、その翌年に作られたもので、類似の銘文がある。

延熹三年五月丙午日造作尚方明竟、廣漢西蜀、幽凍三商。天王日月、位至三公兮。山人。これは中央の“尚方”に納める鏡を“廣漢西蜀”で制作したことをいう。この“廣漢西蜀”に關しては、官營工房か私營工房かで意見が分かれるが、方詩銘の指摘するように民間の工房であった可能性が高い。なぜなら、湖北省鄂州市鄂鋼焦化工地51號墓出土の熹平七年(178)環狀乳三神三獸鏡の銘文には“暴氏作尚方明竟”とあり、河南省新郷市金燈寺47號墓出土の八鳳鏡には、

正月丙午日董氏造作、尚方明竟自有紀。青龍白虎居左右。神魚仙人赤松子。八爵相向法古始。長亘子孫。

という銘文があって、“尚方”は“暴氏”や“董氏”という民間の工房にも鏡を發注していたからである。このように“廣漢西蜀”を中心に環狀乳神獸鏡、獸首鏡、八鳳鏡を制作する工房が集まっていたのであり、これを廣漢派と呼ぶ。この“董氏”八鳳鏡を始め、廣漢派の鏡には、淮派に特徴的な紋様や銘文が散見し、獸首鏡や方銘獸紋鏡には“青蓋”、“青羊”、“三羊”等の淮派の工房名もあることから、鏡匠の移動を含む兩地域間の交流が推測できる。

170年代になると、廣漢派は方銘獸紋鏡を創出する。東京の五島美術館に所蔵する中平六年(189)方銘獸紋鏡は、廣漢派を特徴づける星紋鈕をもち、田字格に區畫した方格に“吾作明竟”“幽涑三羊”“天王日月”“位至三公”の4字句を入れ、その間に獸紋を配している。外區の銘文は七言句と四言句を主とする雜言體で、

中平六年正月丙午日、吾作明竟、幽涑三羊自有己。除去不羊亘孫子。東王父西王母。仙人玉女大神道。長吏買竟，位至三公。古人買竟，百倍田家。大吉。天日月。

とある。このように一人稱の“吾”が鏡を制作したという銘文が出現し、神獸鏡に特有の銘文型式としてその後にも多用されるようになる。

廣漢派の紀年鏡は、初平元年(190)方銘獸紋鏡を最後に途絶する。四川では中平五年(188)に馬相が“黃巾”を自稱して蜀、廣漢、犍爲郡を破壊したという。このような社會情勢を反映して、廣漢派は急速に衰退していったのであろう。しかし、その頃、この地區では三段式神仙鏡や對置式神獸鏡が出現する。四川省綿陽市何家山1號墓から出土した三段式神仙鏡は、その銘文(集釋・華西02)に、

余造明鏡，九子作容。翠羽秘蓋，靈鵝臺杠。調刻神聖。西母東王。堯帝賜舜二女，天下泰平。風雨時節，五穀孰成。其師命長。

とあり、3段に分けた内區の上段に“九子作容。翠羽秘蓋，靈鵝臺杠”、中段に“神聖西母東王”、下段に“堯帝賜舜二女”の圖像を配している。また、西安市未央區出土の三段式神仙鏡には、

余造明鏡，三王作容。翠羽秘蓋，靈鵝臺杠。倉頡作書，以教後生。燧人造火，五味。

という類似した銘文(集釋・華西06)がある。しかし、その上段は“一母婦坐子九人”(集釋・華西01)ないしは“九子作容”の圖像であるのに、銘文は“三王作容”となり、中段は“西母東王”が獸になり、下段は“倉頡作書，以教後生。燧人造火，五味”を表す圖像になっている。このような三段式神仙鏡は、廣漢派との関係は明らかではないものの、四川から陝西にかけて出土することから、華西系とみなされている。

徐州系 淮河下流域の徐州地區では、考古發掘が少ないため、中國では徐州系について未だ十分に認識されていないが、樂浪郡の所在した北朝鮮や日本での出土鏡をもとに、その様相が検討されてきた。

漢鏡6期の淮派であった“尚方”、“龍氏”、“蔡氏”等は、本期前半に畫像鏡や浮彫式獸帶鏡を繼續していた。日本奈良縣佐味田宝塚古墳出土の“尚方”畫像鏡は、内區を四葉紋乳で4區畫に分け、東王公、西王母、車馬、辟邪天祿を配している。神仙は豐滿な表現をもち、鈕座の周圍に珠紋帯を繞らし、周縁は斷面三角形に尖るのを特徴とする。その銘文(集釋708)は、整った七言句で、

尚方作竟佳且好。明而日月世少有。刻治今守悉皆右。長保二親亘孫子。富至三公利古市。傳告后世樂未已。

とある。“今守”は“禽獸”の假借で、淮派の銘文に多い。浙江省嵊州市大塘嶺104號墓出土の“蔡氏”畫像鏡は、これと圖像紋様や銘文が近似する。また、上海博物館蔵の“龍氏”畫像鏡は、東王公、西王母、青龍、白虎を配したもので、それを銘文にも記している。

龍氏作竟自有道。東王公西王母。青龍在左白虎居右。刻治今守悉皆在。大吉。

“尚方”はまた“上方”浮彫式獸帶鏡を制作した。中國での出土は少ないが、北朝鮮や日本から既に50面餘り出土している。それには6區畫の型式と4區畫の型式とがあり、どちらも仙人や二叉の角をもつ巨虚の圖像を入れることが多い。

一方、漢鏡6期末に“袁氏”が登場し、獨特の畫像鏡や浮彫式獸帶鏡を創作した。“袁氏”に近い鏡匠に“田氏”や“銓(至)氏”等があり、森下章司は彼等の作品を“袁氏作系鏡群”と呼んでいる。その中で“銓氏”は沛郡銓縣に由來する姓氏で、今の安徽省宿州市に当たる。畫像鏡の圖像紋様や銘文は漢鏡6期の淮派の中で“石氏”や“呂氏”に近い特徴をもち、圖像表現は吳派の畫像鏡に類似し、上の“龍氏”等との相違は明白である。例えば、《小校經閣金文拓本》15-44の“袁氏”畫像鏡は、東王公、西王母、白虎、及び仙人が薰廬を挟んで相對する圖像がある。その銘文(集釋701)は、

袁氏作竟真大巧。上有東王公西王母，仙人子僑赤誦子。白帟薰廬左右。爲吏高升賈萬。千秋萬歲生長。

とある。中でも“薰廬”の圖像と銘文は、この鏡群と三角縁神獸鏡にしかみられない。また、“袁氏”浮彫式獸帶鏡には5區畫の型式と4區畫の型式とがある。“袁氏”鏡には“上方”鏡のような6區畫の型式がなく、圖像表現にも違いがある。安徽省五河縣金崗6號墓出土の“袁氏”浮彫式獸帶鏡は5區畫の型式で、その銘文は、

袁氏作竟真大巧。上有仙人不知老。渴飲玉泉飢食棗。千秋萬年兮生長久。賈萬倍。

とある。その“袁氏”が最後に制作したのが、華西系の神獸鏡を受容した同向式神獸鏡である。“袁氏”畫像鏡の神像表現、4個の圓座乳、斷面三角形の周縁をそのまま繼承した二神二獸鏡である。しかも、その銘文(集釋702)は、

袁氏作竟真大巧。上有東王父西王母。青龍在左白虎居右。辟邪喜怒無央咎。仙人王高赤容子。千秋萬世生長。

という“袁氏”鏡に特有の七言句である。“袁氏”は自らの畫像鏡に同向式神獸鏡の配置を折衷したのである。

しかし、本期後半における徐州系の神獸鏡の多くは、江南系と同じように、廣漢派の鏡の忠實な模倣に始まった。それには環狀乳神獸鏡、同向式神獸鏡、畫紋帶四獸鏡があり、圖像紋様だけでなく、銘文にもその影響が読み取れる。例えば、日本奈良縣ホケノ山古墳出土の畫紋帶同向式神獸鏡は、方格内に4字ずつ入れた銘文(集釋740)があり、

吾作明竟，幽漣三商。配像世京。統德序道，敬奉臣良。周刻無社，百牙舉樂，衆華主陽。世德光明。富吉安樂，子孫番昌。士至高升。生如金石，其師命長。

とある。上野祥史はその第2、第3句の語順、及び“敬奉賢良”や“衆華主陽”の句をもつことが徐州系の特徴であると指摘する。神獸鏡だけをみれば、上野の指摘は妥當である。しかし、廣漢派の獸首鏡にはこれとほぼ同じ銘文があり、廣漢派からの影響は明白である。特に、本来は第2～第4句が“幽漣三商。雕刻無社，配像萬疆。”とあるべきところを、この銘文では“雕刻無社”を誤って第6句に入れたため、押韻が乱れているが、この錯簡まで廣漢派の獸首鏡を踏襲している。従って、廣漢派の鏡匠が徐州に移動して神獸鏡を制作した可能性もあるだろう。

上の“袁氏”鏡に近い畫像鏡を作っていた“劉氏”は、神獸鏡の制作にも着手した。大阪の久保惣記念美術館に所蔵する求心式神獸鏡は、龍虎座に坐る東王公、西王母に二獸を配した構成で、圖像紋様は一般の神獸鏡と大差ない。しかし、方格に1字ずつ“漢有善同出丹陽。大師得同。合漣五金成。”という希有な銘文を入れ、外区には次の銘文(集釋738)を繞らせている。

劉氏作明竟，幽漣三商。調刻無社，配像萬疆。天禽四守，銜持維剛。大吉，其師命長。服者，敬奉賢良。曾年益壽，富貴。

これと近い時期に制作された鏡が日本奈良縣天神山古墳出土の“劉氏”畫像鏡で、内区を4乳で區畫し、神像には“西王母”と“玉女”の榜題があり、斷面三角形の周縁をもつという特徴は、一般の畫像鏡と大差ない。しかし、その銘文は“劉氏”求心式神獸鏡の外区銘と方格銘とを合成した型式である。

劉氏作明竟，自有善同出丹陽。□師得同。合漣五金，服者，敬奉臣良。巧刻。

起句は同じように“劉氏作明竟”の5字句となり、銘文の後半に錯簡があることも共通する。神獸鏡の受容において“袁氏”と“劉氏”とで姿勢が大きく異なっていたのである。

この“劉氏”畫像鏡に類似した紋様構成をもち、圖像表現が一段と神獸鏡に近づいたのが、斜縁神獸鏡である。中國での発見は極めて稀だが、北朝鮮と日本から50面ほど出土している。大きく2型式に分けられるが、それぞれの圖像紋様と銘文は畫一的である。日本奈良縣古市方墳出土鏡の銘文(集釋741)は、神獸鏡の銘文に由來する四言句からなり、

吾作明竟，幽漣三商。統德序道，配象萬疆。曾年益壽，子孫番昌。功成事見，其師命長。

とある。もうひとつは大阪府安滿宮山古墳出土例で、その銘文(集釋714)は、

吾作明竟自有己。青龍白虎居左右。令人長命亘子孫。作吏高遷車生熒耳。作師長命吉。

という七言句である。“令人...”や“車生耳”は漢鏡5期に淮派が始めて用い、漢鏡7期に廣漢派に傳わった珍しい語句である。

以上のように、漢鏡7期の徐州系は、淮派の畫像鏡と浮彫式獸帶鏡を繼承しつつ、廣漢派の神獸鏡を受容した。圖像紋様や銘文における受容の程度には濃淡があり、それは鏡匠ごとに多様で、結果として多様な鏡種が生みだされたのである。漢鏡5期に“尚方”から獨立した淮派の鏡匠達が、漢鏡6期に吳派の畫像鏡を受容した時も、それぞれに多様な対応を取った。それは東漢時代に鏡匠が藝術家として成熟したことを物語っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2件)

岡村 秀典、鏡にあらわされたシルクロードの奇獣、科学、87-10、査読無、968-972

岡村 秀典、浙江嵊州漢晋文物調査報告、史林、101-5、査読有、68-94

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 3件)

岡村 秀典、岩波新書、鏡が語る古代史、2017、244

岡村 秀典 他、岐阜県現代陶芸美術館、引き継がれるコレクター魂 浦上父子コレクション展、2017、240-245

岡村 秀典 他、聯經出版事業股份有限公司心與物融 饒宗頤先生百歲華誕「漢學與物質文化」國際研討會論文集、漢學與物質文化研究叢刊 03、2018、85-95

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：陳 豪

ローマ字氏名： CHENG Hao

研究協力者氏名：王 星

ローマ字氏名： WANG Xing

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。